

巻 頭 言

研究所の性格とそのあり方

井 本 利 一 郎

7月半ば、工場の一角に新研究所が完成し、移転も終り気分も新たに、研究活動できることは大変うれしいことである。新装なったこの機に当り研究所の性格やそのあり方などについて私の常日頃考えていることの一部を述べてみたい。

研究のあり方とか研究管理について、諸先生方がいろいろとお考えを述べて居られる。どれをお聞きしても大切なことばかりである。研究所も中央研究所的性格のものと、工場研究所とでは研究のあり方、管理方式、また最近環境を良くすることが叫ばれているが、これ等についても自ら差があることと思う。

一般的には、工場の研究所は比較的企業と直結した研究テーマが採り上げられる場合が多いので、研究者は企業の息吹を身近に感じ、また経済の動向も早く知り得ることは一つの良い点であろう。しかし反面、研究に対する若干の雑音も入り、悩む場合もあろう。このような場合お互に立場をかえて考えてみたいものである。勤務時間の問題、処遇の問題等についても生産部門との均衡がむずかしいものである。

実験が基礎段階から小規模、中規模、パイロットへと進む過程において、化学工学、機械、計装関係の専門家の協力、参加が是非必要であるが、この点工場の研究所においては当然良好なる体制が得られ易いはずである。また企業化する場合も人的交流が円滑に行われ、建設業務が早く進むのも特徴の一つでなければならぬ。

企業体は組織、制度の運用により動いている、工場研究所もこれよりはみ出ることにはできないが、研究業務を少しでも早く進めるために、資材購入手続の簡素化、ある程度の保守、工作の職能を自ら持ちたいという希望はどの研究所にも大なり小なりあるようだ。

何んとか組織、制度をうまく運営して、研究者は研究者らしく雑事・雑念を離れ誇りをもって、研究に打込めるよういろいろな障害を地道に取除いて行きたいと私は常に念願している。

(取締役研究部長兼第二製造部長)